

書を抱えてフィールドに出よう!



国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) 法務官補というグローバルな経験をもつ著者の力作。1851年にパリで開催された「第1回国際衛生会議」では、コレラのようなアジア型の病気の拡散は侵略と同じだから、国家間の協力が必要だという欧州の共通認識でした。それ以降、1940年代まで、細菌やウイルスの発見

時を漂う感染症：国際法とグローバル・ 이슈の系譜

著者：新垣修

出版社：慶應義塾大学出版会 2021年8月発行

やワクチン開発など新しい科学的知見の進歩に歩調を合わせ、何度も国際会議が開催されました。なんと第二次世界大戦中の1944年においても、連合国が中心となって国際衛生条約の修正条約が締結されていたのです。

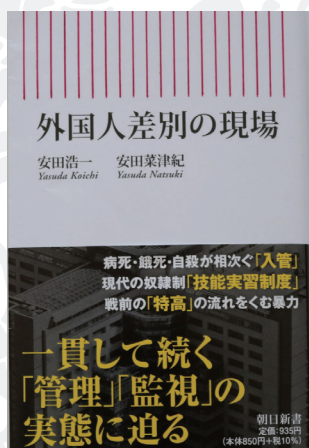
1946年7月WHO憲章に61か国が調印しましたが、国連加盟国26か国が当事国となること(WHO憲章第80条)が条件だったために、そのときには発効できませんでした。その後、要件を満たしたWHOは、1948年4月7日に国連の専門機関として正式に誕生しました。

WHO設立後の世界保健規則の制定やその改正に関して、重要な事項が詳細に

書かれています。たとえば、天然痘撲滅に成功し「感染症の時代は終わった」という風潮のなかで、1980年代に突如世界を席卷したHIV/エイズに旧来の国際法は対応できず、人権保護の視点から国際人権法が対峙するようになりました。

また、「感染症医薬品と特許権」では、グローバルヘルスにおける重要なテーマを法的な視点から解説されています。

本書により、WHOの活動を分析するときに、国際法からの視点が必要不可欠であることを再認識させてくれました。グローバルヘルスの学際アプローチに法学分野から参画いただいたことに感謝します。(紹介者：中村安秀)



外国人差別の悲劇は、2021年に名古屋出入国在留管理局で亡くなったウィシュマ・サンダマリさんだけにとどまりません。スリランカ農村のウィシュマさんの実家、レタス農家で働く外国人技能実習生、縫製工場深夜まで労働する外国人女性。先頭に立って現場に足を運び、外国人の声に耳を傾け、私たちが見過ご

外国人差別の現場

著者：安田浩一、安田菜津紀

出版社：朝日新聞出版・朝日新書 2022年6月発行

してきた日本の現実を発信し続けてきたふたりのジャーナリストの心意気が、本書の隅々にまで響きあっています。

私が知らなかった衝撃の事実をいくつも学ぶことができました。私自身が1991年に訪問した長崎県の「大村入国者収容所」(現在は大村入国者管理センター)が、「外国人は常に管理、監視、取り締まりの対象」であった戦前の内務省の「置き土産」だったことを知りました。2020年に自宅で双子の赤ちゃんを産んだベトナム人技能実習生が、弔いの言葉を書いて、遺体をタオルで包み一晩すごしたただけなのに「死体遺棄罪」で有罪判決が下されました。妊娠をだれにも

告げることができなかった技能実習生の環境を責めることなく、孤立出産せざるを得なかった外国人女性を処罰するとは！いつからこの国は妊娠や出産に対する温かな眼差しを失ってしまったのだろうか愕然としました。

マージナルな集団にこそ、本質的な問題が集約されています。外国人に対する医療や差別の問題を追及することは、まさに日本社会の差別や保健医療のあり方を問い直すことにもつながるのだと改めて実感しました。外国人の保健医療に関心をもつ人にぜひ読んでいただきたい新書です。

(紹介者：中村安秀)